

生、人物寫生、風景寫生、模寫、作圖を課し又本科の學科は東洋繪畫史、有職古寶^(実)、遠近法、圖案法、審美學、應用博物學、和漢文學なりと 尙修業年限は本科五箇年、豫科、研究家は年限を定めずと。

(同第八卷第一号。明治四十二年三月)

○川端畫學校開校式 帝室技藝員川端玉章翁の主宰に係る同校は去九日開校式を執行せり 午前十時を以て式を始め先づ玉章翁校長として祝辭朗讀に次で職員山田敬中氏本校建設の沿革將來の目的意見を陳述し九鬼男爵の代理、正木校長、下條正雄氏の演説、職員總代高橋玉淵氏答辭ありて式を終り夫より餘興として狂言二番あり來賓三百餘名に開校紀念扇子を贈りて散會せり。

(同第八卷第十三号。同年九月)

川端畫學校は人事面において本校との關係が深く、設立主意書(『美術新報』第七卷第二十二号。明治四十二年二月所載)の執筆には正木直彦があたっている。これより本校入学者中に川端畫學校出身者が増え始めた。

⑤ 原田直次郎遺作展覽會

洋画家原田直次郎(明治三十二年十二月二十六日死去)の十四回忌にあたり、友人青山胤通、正木直彦、黒田清輝、森林太郎、徳富猪一郎、長沼守敬らの発起により、明治四十二年十一月二十八日上野

精養軒で紀念會が開かれ、同日正午より本校内で遺作展が開催された。肖像画を主とする数十点が展示され、それらの写真と旧友の懷旧談を載せた『原田先生紀念帖』が翌四十三年に原田直次郎氏紀念會によって発行された。

⑥ 第三回文展

明治四十二年十月十五日より同年十一月二十四日まで上野公園竹の台陳列館で第三回文展が開催された。日本画の部門は国画玉成會が妥協し、今回初めて新旧各派綜合の展覽會となり、審査委員の作では横山大観の「流灯」、竹内栖鳳の「アレタ立に」、寺崎広業の「溪四題」、川合玉堂の「高嶺の雲」等が、また、一般の出品では菱田春草の「落葉」と尾竹国観の「油断」(ともに二等賞)が好評を博した。平福百穂の「アイヌ」の出品もあったが、これは授賞の対象にならなかった。下村観山は出品せず、玉成會研究会展(同年十月六日より不忍池畔勸業協會で開催)の方に「小倉山」を出品して高く評価された。

西洋画は審査委員の作では岡田三郎助の「大隈伯爵夫人肖像」、鹿子木孟郎の「新夫人」、黒田清輝の「鉄砲百合」等が、また、一般の出品では中沢弘光の「おもひで」、山本森之助の「濁らぬ水」、吉田博の「千古の雪」(ともに二等賞)、山脇信徳の「停車場の朝」(褒状)等が好評を博した。

彫刻は審査委員の作では新海竹太郎の「原人」、一般の出品では朝倉文夫の「山から来た男」、荻原守衛の「北条虎吉肖像」(ともに